

実地演習を終えて

四天王寺大学 三野沙英子

1 実習校 城陽市立西城陽中学校

2 実習内容

(1) 授業

ア 朝学活・終学活

一日の流れを確認する意味合いもありますが、生徒の体調などをしっかりと確認する意味合いもある為、生徒とのコミュニケーションが重要となっていました。

また、一日の締めくくりでもある為、明日の連絡事項や行事の折に触れての話をまじえることで、明日への流れを作る大事な場面だと感じました。

イ 授業見学

自身の専門教科や、専門以外の教科を見学しました。先生方の、授業内での生徒とのかかわり方や、授業の進め方など、自分はどうすべきか思案しながら参加しました。

ウ 体育大会

主だった練習は校庭で行われるため、天候に左右されることが多いです。しかし、朝の時点でしっかりと指示を通しておくことで、僅かな晴れ間にも迅速に行動でき、練習を行っていました。また、3年生が主体となって行うことで、次第に下級生をまとめ、自らも行動で示すというような成長が見受けられました。

(2) 給食

生徒とともにすることで、授業内では見られないような一面を知ることができ、また、何気ない会話の中でのことを他のかかわりの中でも生かしていくことができました。

(3) 掃除

一緒にする中で、しっかりとこなしていく子、遅れているところに何気なくフォローができる子など、新しい側面を垣間見ることができました。

(4) 部活動

普段なかなか話すことができない生徒とも、共通の話題ができ、交流することができました。また、1つ経験したことの話題で交流が深まることがわかりました。

(5) 職員会議

普段の連絡や、体育大会の時期だったので、晴れ間を生かした練習などについて細かく連絡し、迅速に動けるように綿密な打ち合せが行われました。

その後の学年ごとの会議では、その学年に合わせた連絡事項が話し合われていました。

3 実習を終えて

生徒目線だけでなく、教員側の目線を知ることで、今まで気づけなかった教員の大変さ、また、教員としてのやりがいを知ることができました。

また、実習の中で自身に足りないものや、大学でまだまだ学ぶべきこと、自身の特徴として伸ばしていくべき点などを知ることができたので、この経験を生かしてさらに成長していきたいです。

教員という立場に立って感じたこと

龍谷大学 田原正太郎

1 実習校 宇治市立東宇治中学校

2 実習内容

- (1) 3年生のクラスに入り、学級活動に参加した。朝学活、体育大会の準備、合唱コンクールの練習などに参加した。また、昼食時間は生徒と一緒に食べ、交流した。
- (2) 社会科の授業を中心に、他教科や特別支援学級の授業など様々な授業を見学した。また、自己紹介などを行い、生徒の前に立つ経験をさせていただいた。
- (3) 休日は、部活動（ソフトテニス部）に参加した。練習の参加や試合の引率などを行い、生徒と交流した。

3 実習を終えて

私は、将来、社会科の教員になりたいと思っています。実際に学校現場を体験し、教員という仕事を知ること、また生徒とのコミュニケーションの取り方を学びたい思い、このインターンシップに応募しました。

私は、これまで生徒の立場からしか、学校や先生を見てきませんでした。しかし、教員の立場に立って学校現場や先生方を見ると、教員という仕事の大変さを目の当たりにし、先生方がさまざまな工夫をされ授業や指導をされているということに気づきました。

先生方は生徒と接する裏側で、さまざまな準備や対応をされていました。私が見ただけでも、授業だけでなく、生徒指導、部活動、昼休みの見回り、役職や学年での会議、教材の準備、行事の準備などがありました。また、トラブルが起きたときは、それに対応するため一日の授業予定を変更したり、代わりの先生が教室に入るなど、その場、その場で臨機応変に対応されていました。そのような学校現場を見て、教員という仕事の大変さや難しさを感じ、自分の課題をたくさん感じました。

次に、生徒との関わりについて学んだことを述べていきます。私は、実習へ行かせていただく前、生徒と「積極的に」関わるというテーマをもっていました。積極的の意味は、正直、漠然としていました。実習を通して、教員としての積極的な接し方とは、ただ自分の考えを伝えるのではなく、まず生徒のことを考え、それから伝えることなのだと思います。ある先生は、「生徒の目線で考え、その上で教師として接することを一番大切にしている」と仰っていました。頭ごなしではなく、まず生徒のことをよく見て、生徒の話聞き、どんな生徒なのかを理解し、その生徒のためになることはなにかを考え、伝えることが教員として大切な姿勢であると学びました。

最後に、この実習で、生徒と接する中で、嬉しさや感動をたくさん感じました。自己紹介で教壇に立ったとき、生徒たちが質問をたくさんしてくれて、とても嬉しかったです。部活動の大会や合唱コンクールなどで生徒の凛々しい姿を見た時は、心から感動しました。短い期間でしたが、実習に行かせていただき、教員という仕事の難しさや大変さを感じました。しかし、その分、生徒と関わり、生徒の成長を見たとき、心から嬉しいと感じることができる仕事なのだと思います。この経験を心に留め、将来教員になり、生徒の成長を支えられるような存在になりたいと思いました。

教員養成サポートセミナーを通しての学び

京都女子大学 今西佑奈

京都女子大学 梅田潤子

1 実習校 宇治市立菟道小学校

2 実習内容

(1) 1日の流れ

ア 朝の挨拶運動…校門に立ち挨拶をして、登校してくる児童を迎えた。

イ 観察授業、学年・委員会活動などへの参加、授業補助…配属されたクラスのみならず、他の学年の授業も観察させていただいた。また、授業中のプリントや宿題の丸付け、被服実習などの授業補助も行った。

ウ 休み時間、給食、掃除…休み時間は児童たちと鬼ごっこや遊具で遊んで過ごした。給食の際には、配膳指導・補助をし、クラスで児童たちと給食を食べた。掃除の際は、児童とともに教室の掃除を行った。

エ 運動会の準備、当日の補助…グラウンドのライン引き、備品の準備・後片付けなどを行った。

(2) 実地授業

私たちはそれぞれ2年生と5年生で、算数の実地授業を行った。夏休みから指導案作成に取り掛かり、指導教諭の先生、そしてクラス担任の先生から掲示物、板書、発問などの助言を事前にいただいた。また授業後には、それぞれの先生方から講評をいただき、実習生同士も互いの授業について振り返った。

3 実習を終えて

この実習を通して、大切にしたいと感じたことが3つある。まず1つ目は、児童に対して思いやりの心を持つということだ。担任の先生は、学習に支援が必要な児童にも理解しやすいように、実際に実物を見せ、ジェスチャーを行うなど常に児童目線に立ち、授業づくりをされていた。また、今日学習したことはその日のうちに理解させるために、空き時間に個別で指導している姿を見て、教師は児童への愛情を常に持ち続ける仕事だということを強く感じた。

2つ目は、その場・その時で厳しく叱るということだ。実習前は叱り方がよく分からなかったが、その大切さに今回気付くことができた。叱るべき時に叱らないのは、児童のことを大事に思っていないことになる。そのため、児童を正しい方向へ導くことができる叱り方をもっと学びたいと思った。更に児童のことをよく見て、できるようになったことを評価し、帰りの挨拶では児童とハイタッチをするなど、児童に寄り添う心を持ち続ける教師になりたいという新たな目標ができた。

3つ目は、どんな小さなことでも学びに繋がるということだ。算数のプリントの丸付けにおいても、ただ単に丸付けをするのではなく、児童たちの理解度を確認しながら丸付けをすることを心掛けた。すると、思ってもみなかった児童のつまづくポイントをたくさん発見することができた。どんな小さなことでも、自分自身の学びにつながるということを意識したことで、見えてくる児童の実態や先生方の児童と向き合う姿を今後の指導にも生かしていきたいと思う。

最後に今回の実習を通して、自分の強み、そして弱みを理解することができた。今後、強みはさらに確固となる強みに向上させ、弱みからは逃げず克服できるよう学び続ける姿勢を忘れずに実践的指導力を高めていきたい。